

〔左〕高円寺にある「カフェアパートメント」。酒井さんの「建築家」としての原点は、カフェのマスターだった。〔右〕コミュニティFM「東京ウェッサイ」（FM84.4）は、毎週土曜日に放送。酒井さん（左）がパーソナリティを務める。

背景イラスト＝bocca



大学時代を振り返って、どんな学生でしたか？

大学受験では、工学部の建築学科に行くつもりで勉強していたのですが、男女比1:1という奇跡的な（笑）ムサビの建築学科を発見して、センター試験が終わってから無理矢理デッサンと立体構成を勉強したんです。でも、入学後にすごく苦労した。同級生の多くはしっかり勉強して、になりたい建築家像をなんとなく持っていた。僕はそれにコンプレックスを感じていて、学校に行くのが苦痛でした。結果、1年生の時は19単位しか取れなかったんです（笑）。

そんな調子で3年生が終わろうとしていたとき、源実日見先生に近きついた。「ぶっちゃけ建築の何が面白いのかさっぱりわからない。教えてくれ！」って（笑）。春休みに源先生の自宅に押し掛けて、週2回の個人レッスン。3年間ずっと抱えていたいろいろな疑問を源先生にぶつけました。源先生のお陰で少しずつ建築の面白さを知ることができ、空白の3年間を取り戻すために大学院に進みました。

大学院ではどんなことをしていたのですか？

高円寺に「カフェアパートメント」という“みんなのリビングルーム”のようなカフェをつくりました。建築学科にいたと他の学科と違って、図面や模型でひたすらコミュニケーションを繰り返すことに、少しもどかしさを感じていたのかもしれませんが、それから、建築が箱というハードだとしたら、僕はその中身のソフトに興味があって、でもそれだけで建築の図面や模型だけではどうしても表現できない、だからつくるしかなかったって感じですね。

卒業後もカフェの厨房に立ち続けながら、空間の使い方の観察や、都市の中での位置づけを考察することがとても勉強になりました。カフェと同時にやっていたグラ

フィックのデザインの仕事の方もだんだんと忙しくなり、カフェを始めて7年目にデザイン会社を設立しました。

建築のソフトに興味を持ったきっかけは何ですか？

建築を引いて見ていたこともあります。建築家の仕事は何かと考えたときに、ハードをつくることだけなのかと疑問を持ったことがはじまりです。もうひとつの大きなきっかけは、大学4年生の卒業間際に学生結婚をして、子どもを持つことになったんです。今考えると、子どもを育てることを若いうちに経験できたことは、とても良かったと思います。子育てを通して、建築を生むだけではなく、育てるフェーズにおいてもかわれる建築家像のあり方を模索するようになりました。

ターニングポイントになった仕事は何ですか？

やっぱりカフェですね。当時建築を育てるプロセスに着目してカフェというコミュニティスペースをつくるような建築家はなかった。どんなプロセスを経たら自分にしかできないかたちで建築にたずさわることができるかを考えた結果、カフェ経営を通して自分なりにスタンスが少し確立できたかなと思います。

その次のターニングポイントは、「東京ウェッサイ」という立川を拠点に置くコミュニティFMラジオでしょうか。「建築」を建てること以外にできるアプローチで、都市や地域にかかわることができないかと思って3年前に始めました。

どうして「都市」や「街」に興味を持ったのですか？

きっかけは、子どもですね。僕は地方出身者ということもあり、どうも東京という都市に対して根拠が生えるようなイメージを持てなかった。でも、うちの子どもは

僕と違って、東京の国分寺に生まれ育ち、彼なりにちゃんとその土地に根っこを生やしているんです。以前、運動会で父兄も参加する「国分寺音頭」があって、その時にはじめて自分の住む街のコミュニティとの接点を実感することができた。

これからの少子高齢化社会において、地域コミュニティはとても重要になってきます。僕の場合は子どもが地域とのつなぎ役になってくれた。そういった経験から、僕と似たような境遇の人でも地域のコミュニティにアクセスできるようにメディアが必要だという想いを持つようになりました。

ラジオを続けて来て何か成果はありましたか？

ボランティアで始めたラジオも、毎週放送しているので、もう300組以上のゲストと話しているんですよね。番組を通じてなんとなく地域（主に東京の西側）の関関図が出来てきた。今振り返ってみると、3年かけてつくった地域のネットワークこそがこの取組みの一番の成果だと思います。それが、ルミネ立川の屋上に地域に開放し実施されたイベント「あおぞらガーデン」*であったり、中央線の高架化（三鷹～立川間）にともない、JR中央ラインモールが地域と一緒にこれからのライフスタイルを探り、実践するきっかけを生み出す「ののわ」プロジェクトへの参加につながったと思います。

*表紙写真

多岐にわたる酒井さんの仕事に共通するキーワードはありますか？

やはり「メディア」なのかな。メディアを活用し、かたちのない公共空間をつくるイメージでしょうか。いまは、個人で簡単に自分のメディアが持てる時代。個人的なモチベーションから、それぞれに小さな活動を起こしている人たちが増えている。そういう人たちを束ねて紹介していることや、メディアを通してみんなを巻き込むようなムーブメントをつくることで、大きな力を生むことがある。かつての公共空間のイメージが、大きな箱で個々の個性をすっぽりと包み込むものに対して、個々の輪郭が有機的にくっついたり離れたりその都度姿を変えるのが、僕の持つ新しい公共空間のイメージです。

一人ひとりが個性を活かし、社会に対しても自分に対してもポジティブな想いを持って、その基盤となるネットワークメディアを僕はつくり続けていきたいと思っています。

TOPICS



House をつくること

増満 兼太郎

House. 代表 [33期]

*表紙写真

増満 兼太郎 Masumitsu Kentaro
造形作家

2000年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2002年アトリエ「House.」で手製靴を主に手仕事での活動をはじめる。2005年自ら改装した古屋で展示会ハウスのハウス展を開催。家具や暮らし周りの道具製作も始める。現在、革・金属・木・紙・廃材などの素材を用いて使う道具やオブジェ、版画、映像などを制作している。

http://www.house-jp.org



「僕がつくりたいのは“生活建築”なのです」と、卒業制作で『私的領域』と題して靴の実作を並べたのは、もう10年以上も前になります。その時、僕は、箱の形をしていなくても住宅（家）を含めたそれより小さいモノコトも建築だということを伝えなかったのです。今思うと、とても個人のなことに興味があったのですね。

程なくして「House.」というアトリエの名前で、ものづくりの生活（主に手製靴から）が始まりました。古家を修理したり、必要な椅子・机やキッチンなどをつくりたり、さらには玩具や版画などにも広がってきました。

そんな自給自作の中で、「House.」について一つの発見がありました。

「生活」を「家」に例えてみると、椅子やテーブルはもちろん、服や靴などの実用品は「家具」、モビールや銅版画など実用を離れても日常を彩るものは「窓」、と言えるということでした。家具は、使うことが楽しくなる道具たち、何かのための必需品です。窓には、その時々で景色が変わり、新しい風が吹いてきます。入口になったり出口になったり、掛け替えたりもできる素敵な「窓」です。

シンプルな家具と風通しの良い窓、それがずっと思っていた僕の「House（家）」のイメージだったのです。

「暮しが仕事 仕事が暮らし」*

暮らすことと手仕事で賄う「House（家）」づくり。そうあったらいいと思つ、日々を過ごしています。

今後は復興支援活動に積極的に活動されている本会員の方々のお話を参考に、日月会独自の輪を広げながら活動を継続していければと考えています。皆さん、是非と

*陶芸家河井寛次郎の言葉

INFORMATION

2012年 イベント 報告

4月21日 | フォルマ・フォロ セミナー第6回

真壁智治（プロジェクトプランナー）

「ザ カワイイ ヴィジョン〜新たな抽象性を求めて」

討議：難波和彦（建築家）松田行正（デザイナー）

たたみかけるダイヤグラムの数々。カワイイの本質をモダンデザインと対置し解明してゆく手際に圧倒された。カワイイに日本発の情感をみつつも、それをこれからのデザイン概念として位置づける試みは刺激的だった。

7月7日 | 第14回日月会賞の審査と表彰*

太陽賞：柳川藍子、藩セイエ、

内山菜、篠田咲和子「Bambrella」

満月賞：若林由理、荒井瑛里香、藤村駿斗「たなぼこ」

三日月賞：深澤理絵子「芸者とおり」

新月賞：石川あかね「表」裏

審査員長/小泉一斉 審査員/小林祺長、清水達也、向田良文、千葉万由子、船曳桜子、内海聡、北嶋勇佑

ご挨拶

小倉 康正 Ogura Yasumasa 朝比奈 ゆり Asahina Yuri
日月会事務局 [18期]

9月8日 | フォルマ・フォロ セミナー第7回

相沢昭男（民俗学徒）「壊さない建築家を目指して」

対談：岩下泰三（スペースラボ／15期）

大学進学までを過ごした水戸時代から、後にライフワークとなる会津・大内宿に辿りつくまでの半生。そこに紹介された数々のエピソードは「相沢昭男」の人物そのものを語っていてどれも興味深かった。反骨精神と一匹狼的な存在は、水戸藩士で育てられたからか、ムサビ建築卒だからだろうか。

10月27日 | 日月会シンポジウム第3回

「2014 建築学科創設50周年に向けて」

パネラー：田中陽明 [26期]・田熊里子 [36期]・飯田彩 [37期]

司会：小倉康正 [18期]

デザインするってどんなこと？みてきたのは、人を結ぶネットワークづくりもデザインだということ。より広い視野が必要となるが、新しい仕事も眠っているらしい。ならばこれに対応した教育は…。50周年を迎える学科の理念にまで話は及んだ。

更田 邦彦 Fukeda Kunihiko

日月会会長 [16期]

も自ら手を挙げて「311サポート・フォロ」の活動にご参加ください。震災を過去のものとし、会員一人ひとりの思いが、日月会の支援を具体化していく力となるでしょう。

それ以来来年度（2014年）は、建築学科創設50周年を迎えます。研究室では布施茂氏（本学教授・日月会正会員17期）を委員長とした実行委員会が立ち上げられました。その記念大会を前に、会員それぞれが建築学科50年の歴史を振り返り、今後の展望を考え、発言していくことも求められるでしょう。

日月会も新たな局面を迎えるにあたり、4月から新会長のもとまた新たな展開がスタートします。3月末に開催される総会は、その目出の日でもあります。皆さんのご参加をお待ちしています。

最後に、この4年間、拙なる私をお支えいただいた会員の皆様に御礼申し上げます。今後とも日月会へのご支援・ご協力をお願い申し上げご挨拶いたします。



↑太陽賞を受賞した「Bambrella」

*日月会賞の対象は3年生の前期課題

↑真壁智治氏（左）、相澤昭男氏（右）

表紙写真

ルミネ立川店開業30周年を記念して開催された「あおぞらガーデン」。「地域とのつながり」をテーマに、立川周辺で活躍する人が中心となってイベントを盛り上げた。インタビュー参照。（写真提供＝リライ）

編集後記

今号から誌面を全面リニューアルしました。世の中の状況が大きく様変わりする今。「フォルマ・フォロ」はどんな時でも、社会にまなざしを向け続け、新たに生まれる「建築」の姿を追っていききたいと思います。[onai]

編集：尾内 志帆、雨川 美津季

デザイン：松井 雄一郎・長尾 周平

印刷：株式会社山田写真製版所

発行：武蔵野美術大学建築学科

同窓会・日月会

http://www.nichigetsukai.com

東京都小平市小川町1-736

武蔵野美術大学建築学科研究室内

Forma-Foro

13

フォルマ・フォロ | 武蔵野美術大学建築学科・日月会

MAR.1.2013 | VOL.13



